

今少しになり糸切れて鱧水中へ落ちる。篠原出羽未だ勘六といひける時、橋下の海中へ飛入り、鱧をとらへたり。去れども深き故に水に溺れ、既に死せんとす。各、飛入り、勘六を引上げたり。役にも可立者也とて、篠原彌助の養子に命ぜられけり。其の後彌助實子織部出生す。此の織部も十二三歳の時、利長卿の御前にて鐵炮にて遊ばしたる鷲を織部取つて押へたり。鷲織部が手に取付きて、爪を打立てつかみてしめたり。其の爪、手の肉に五分程宛入りたりけり。されども織部貌をしがめず、押付けて居たり。利長卿其の軀を御覽なされ、往々々々は急度役に立つべきせがれなりと譽め給ひしとなり。按ずるに、篠原氏の傳説共は、此の外にもさまざま見わたれど、今悉く之を載せず。幼年の頃より氣性の高き事知られ、殊にその一族までもその氣をうけたりといふべし。

○山田如見舊第并傳話

石引町岩倉寺由來書に、慶長十八年に篠原出羽町山田如見と云ふ人の屋敷買請、寺建立仕處、寛永七年出羽町寺地被召上、替地石引町に而拜領被仰付とあり。按ずるに、山田

如見が事は、萬治三年に記載せし脇田如鐵自記に、源氏物語相傳之事、一華堂乘阿・如見・古田織部公は西三條三光院殿也。源氏執心一部之功訖。雖然如見、一華堂傳授之趣講釋可申所望より、度々讀申内に、兩殿之御用書并に口決不殘如見被物語也。如見居士は薩州住人、爲遊客。歌道一篇に志深く、住宅を不求、國々流浪して、所々に於て人々の親しみ不淺、こゝろばせ風流にして無欲の人、是を感ずるのみ。一とせ芳春院殿自江戸加州へ被爲入候折節、如見を御誘引有つて、加越能連歌師共此の流を汲む輩餘多あり。幸と切紙傳受の人は、予一人と覺候。其後利常卿室號天德院殿、御扶持人となり、官女號岩崎と云ふもの源氏相傳、弟子に被成、數年金澤に在留す。又云ふ。古今傳授之事、宗訊・宗柳・島田屋常信・石野和泉・芳春院殿、牡丹花・財部眞存・薩州住人・麥生田道徹・財部以貫・同宗佐・如見・芳春院殿・脇田九兵衛直賢・山田仁右衛門・今枝・民部直友・奥村因幡和豐。又云ふ。古今集傳授之事、宗訊聞書芳春院殿へ石野和泉より依上之、如見古今集傳授元祖眞存一流之趣、芳春院殿被聞召及、依御懇望讀申處、宗訊聞書如合符節、勿論彌御

信仰不淺。如見嫡孫山田仁右衛門依若輩、難波津之歌岡有由にて予に被預、彼者成長して、可相傳任遺言、箱をもひらき申折節、直友執心不淺に因つて同聽。宗訊、眞存聞書之箱共に綱利卿之御文庫に有之、牡丹花嫡流無疑事可知。眞存法師は歌人也。夢庵へ所望之發句。

うぐひも梅が香をしむ羽風哉 宵 柏
依傳聞之記了。右如見法師固より一所不住之人にして、又遊客と成りて京都に登り、其の後武州到江戸、後藤少三郎宅にて終に身まかり訖ぬ。于時七十五歳。

飛ほたるこゑきかぬ玉の行え哉 直 賢
右某子孫末々に成り、如何成る筋の玉かづらかけても知らぬ世に、もし此の筆の蹟残り留らば、心得給へ。あなかしこ。

萬治三年正月吉辰 脇田九兵衛直賢入道如鐵判

山本基庸筆記に云ふ。微妙公は、東鑑をば寝間に被爲入候て、御目の覺めて被成御座候内御覽被成、折々女中岩崎など御前へ出候節、東鑑にかやうに有之と被仰候へば、それに應じ御咄申上候。此の岩崎は山田仁右衛門の叔母に

て、書物をなる程見申もの、山田如見が娘に候と、不破平左衛門咄承之とあり。

○永原土佐孝治舊邸

出羽一番町二番町兩町へかけその舊邸なりといふ。土佐歿後、其の子左京孝政此の第地に居り、後移轉す。故に此地をば永原左京揚屋敷と呼べり。按ずるに、土佐孝治の父赤座備後吉家は、若名久兵衛と稱し、初め越前國今庄の城主にて、秀吉公以來豊臣家の麾下たりしが、慶長五年關原合戦後、領分を沒收せられ、利長卿に隨從し、吾が藩士と成りたり。寛文十一年永原左京由緒帳に云ふ。祖父赤座備後、太閤様御朱印頂戴致し、越前今庄に罷在刻より大納言様・古肥前様御懇に而、上方御上下之度々御腰被懸、關原御陣以後御國へ被召寄、七千石被下、松任、城に罷有。其の後金澤へ引越、慶長十一年相果て候。と見、三州志古墟考頭註に、慶長六年瑞龍公之を招き七千石を賜ひ、松任城に置かせられ、同十一年三月越中大門洪水の時、乗馬にて涉り誤つて溺死す。とあり。二代土佐孝治遺知七千石相續し、大坂陣の後利常卿の内命に依つて、赤座を改め